

放送作家

海老原 靖芳さん(63)

新春を寿ぐには笑いが一番。

立川志の輔さんが、落語の未来について語っている(元日付長崎新聞)。師匠は、日本人が今、落語に引き付けられる理由を次のように語る。

「しんどい時代だから、笑いたい」「顔を見なくてもメールやSNSで連絡できる現代に、落語は登場人物たちが面と向かって話すというコミュニケーションの原点を描いている」

放送作家の海老原靖芳さんは、子どもたちが落語に親しんでもらおうと、故郷の佐世保市で「佐世保かっちえて落語会」を7年前から主催している。

大学卒業後、結婚してコピーライターをしていた。ある時、日本テレビの「巨泉×前武ゲバゲバ90分」の特番でギャグ、コントを募集する新聞記事を見つけた。ゲバゲバは、ともに放



昨年5月22日に開いた第12回「佐世保かっちえて落語会」の打ち上げで。前列左から春風亭一之輔、入船亭扇遊、柳家喬太郎。後列中央が海老原さん(本人提供)

人間関係基本は笑い

帰郷し落語会立ち上げ

を見よ、本を読み、と。

こうして放送作家の道を歩むことになる。それを機にザ・ドリフターズ、コント赤信号、とんねるず、ビートたけしとたけし軍団などが登場する人気番組の台本を執筆した。1995年から9年間、NHKテレビ「コメディー お江戸でござる」の脚本を任せられ、放送作家としての地歩を築く。

50歳の時だった。佐世保市から市制100周年記念の企画を依頼された。脚本から演出まですべてを担当。市民100人と吉本新喜劇メンバーが共演するという異例の舞台が実現した。

それは一方で、ふるさとを見直すきっかけとなった。時代は変わりつつあった。テレビもしゃべるばかりのトーク番組が増えた。そうすると、放送作家の居場所はどうなる。他方で、ここまで何とかよくやってきたとの思いもあった。

佐世保市民に戻った海老原さんは笑顔で語る。「笑いは空気と同じぐらい大事です。人と人との関係も基本は笑いです」

自ら新作落語をつくり、子どもたちにけいこをつけたい。柳家喬太郎、小宮孝泰を迎えての第1回落語会が開かれたのは2010年8月。好評を博した。年2回の開催で、昨年まで13回を数え、志の輔、春風亭昇太、林家正蔵などの師匠が駆けつけた。

取材したのは、年の瀬の雨の日だった。海老原靖芳さんとはむろん初対面だが、待ち合わせたJR佐世保駅構内で、同行のカメラマンに、ここに笑いなからよく通る声で言った。

「こんな日こそ写真の腕がためされるよね。でも雨はかえっていいかもしれないよ」。取材するわれわれを逆にリラックスさせたという気遣いだったのだろう。が、実は写真家を目指した時期もあったというから、並みの言葉ではない。

雨の中、傘を差しながら海老原さんを撮影する場所まで歩く途中、こんなことも語ってくれた。映画監督の黒澤明は雨が好きで、雨のシーンを撮った作品が少なくないという。そのついでに、「七人の侍」の庄巻は雨中の合戦場面だった。

取材のあとで

取材したのは、年の瀬の雨の日だった。海老原靖芳さんとはむろん初対面だが、待ち合わせたJR佐世保駅構内で、同行のカメラマンに、ここに笑いなからよく通る声で言った。

「こんな日こそ写真の腕がためされるよね。でも雨はかえっていいかもしれないよ」。取材するわれわれを逆にリラックスさせたという気遣いだったのだろう。が、実は写真家を目指した時期もあったというから、並みの言葉ではない。

雨の中、傘を差しながら海老原さんを撮影する場所まで歩く途中、こんなことも語ってくれた。映画監督の黒澤明は雨が好きで、雨のシーンを撮った作品が少なくないという。そのついでに、「七人の侍」の庄巻は雨中の合戦場面だった。



数多くのテレビ番組を手がけた放送作家の海老原靖芳さん。40年ぶりに帰郷、新たな活動を展開している

佐世保市五番街

プロフィール

えびはら・やすよし 1953年、佐世保市生まれ。県立佐世保南高校、青山学院大学経済学部

卒。コピーライターをした後、テレビ番組「巨泉×前武ゲバゲバ90分」の特番で認められ、放送作家に。ザ・ドリフターズ、コント赤信号などの台本を書き、「コメディー お江戸でござる」の脚本を担当。数々の人気テレビ番組にかかわる。

2010年に「佐世保かっちえて落語会」を立ち上げ、その後佐世保に帰郷移住した。著書に「佐世保に始まった奇蹟の落語会」「還暦すぎて、陽はまた昇る」など。日本放送作家協会、日本脚本家連盟所属。

文・特別編集委員 峠 憲治
写真・写真メディア部 則行優志